



棟梁集

十

2  
4772  
8



門 2  
號 4772  
卷 8

高田早苗  
昭和二十二年三月廿三日

Handwritten text in vertical columns, likely a list or record, written in a cursive style. The text is arranged in approximately 10 columns, with some characters appearing to be in a different script or dialect. The ink is dark and the paper shows signs of age and wear.



標記帳目

十

五 庭新樹

若くはしきまうさるるこけらひ  
おしらやおろし 庭のあはれ

雜 鷓

かくしつあはれつあつー ちまひ  
ちまひつらふさやまふさ

五 柳系

柳のこゝろいふもさるやまのこゝろ  
たておやまの 姓柳の子



Handwritten text in a rectangular frame on the right page, including the name 'C. H. M. Co.' and other illegible characters.





ま

あまのこころのまをまかたけん  
うきうきとまをまかたけん

まをまかたけん

~~まをまかたけん~~ まをまかたけん

~~まをまかたけん~~ まをまかたけん

まを

まをまかたけんのまをまかたけん

まをまかたけんのまをまかたけん

まをまかたけん

まをまかたけん  
まをまかたけん  
まをまかたけん  
まをまかたけん

ま

ま

まをまかたけんのまをまかたけん  
まをまかたけんのまをまかたけん

まをまかたけん

~~まをまかたけん~~ まをまかたけん

まをまかたけんのまをまかたけん

まをまかたけんのまをまかたけん

まをまかたけんのまをまかたけん

まをまかたけんのまをまかたけん

まをまかたけんのまをまかたけん

ま

ま

まをまかたけん

あつた新書はくらくと  
読り入るあつたつたつた  
とつたつたつたつた

け言は田の邊のつたつた  
の白のつたつたつた

清水のつたつたつた

とつたつたつたつたつた  
つたつたつたつたつた  
つたつたつたつたつた

三のつたつたつたつた

あつたつたつたつたつた  
つたつたつたつたつた

かを

とつたつたつたつたつた  
つたつたつたつたつた

つたつたつたつたつた  
つたつたつたつたつた

つたつた





龍

龍

月も影もつゝあつてもさしほつて

はるかにひびきあつてもさしほつて

あつてもさしほつてあつてもさしほつて

あつてもさしほつてあつてもさしほつて

あつてもさしほつてあつてもさしほつて

あつてもさしほつてあつてもさしほつて

あつてもさしほつてあつてもさしほつて

あつてもさしほつてあつてもさしほつて

あつてもさしほつてあつてもさしほつて

あつてもさしほつてあつてもさしほつて

あつてもさしほつてあつてもさしほつて

あつてもさしほつてあつてもさしほつて

あつてもさしほつてあつてもさしほつて

あつてもさしほつてあつてもさしほつて

あつてもさしほつてあつてもさしほつて

あつてもさしほつてあつてもさしほつて

あつてもさしほつてあつてもさしほつて

龍

いさくはかるたにみよき事なると  
てあつるはるの **水**うら

あな 川のなみのけのあまの所  
こつうのいおひり

こつうの **水**うら  
あひまのあまの **水**

あな 川のなみのけのあまの所  
こつうのいおひり

あな 川のなみのけのあまの所

こつうのいおひり  
あな 川のなみのけのあまの所

あな 川のなみのけのあまの所

あな 川のなみのけのあまの所  
こつうのいおひり

あな 川のなみのけのあまの所

あな 川のなみのけのあまの所  
こつうのいおひり

あな 川のなみのけのあまの所

き

ひのくにの ちのくにの ちのくにの ちのくにの

しよあふたはたふ

千本のもろけ 善賢家の極

路

善

ての下 一の物 一の物

ふせいのる ぬきあはれ

ひのくに ちのくに ちのくに ちのくに

ちのくに ちのくに ちのくに ちのくに

千本の善 ちのくにの ちのくにの

善賢家  
林風

この大原三伝 重成とやちあて

あふたあふたの 十のうたれあふたあふた

あふたあふたの ちのくにの ちのくにの

あふたあふたの ちのくにの ちのくにの

あふたあふたの ちのくにの ちのくにの

あふたあふたの ちのくにの ちのくにの

あふたあふたの ちのくにの ちのくにの

あふたあふたの ちのくにの ちのくにの

あふたあふたの ちのくにの ちのくにの

賢者の極のる之ト一山城名  
 勝志二の考より久也  
 平西面寺座主成賢の記と  
 りものる、多不大輪、空の侯  
 印色しを、蒼の、真紅色し、花中  
 六量あり、吾賢の家の子を  
 表し、蒼の、お色い、家の、  
 系の形を、  
 表し、系、  
 表し、系、

つナ物をも表し、とらり、  
 賢者、  
 登所、  
 別、  
 今、  
 極、  
 言、  
 行、  
 て、

興義坊殿

いしし

秋らる

あつらひのうらみはさる秋の  
時をわたりて

秋の  
泥箱

あつらひのうらみはさる秋の  
時をわたりて

鳥

あつらひのうらみはさる秋の  
時をわたりて

あつらひのうらみはさる秋の  
時をわたりて

秋子

あつらひのうらみはさる秋の  
時をわたりて

あつらひのうらみはさる秋の  
時をわたりて

秋子

あつらひのうらみはさる秋の  
時をわたりて

あつらひのうらみはさる秋の  
時をわたりて

秋子

あつらひのうらみはさる秋の  
時をわたりて

14  
御  
宗  
宗  
宗  
宗  
宗

ハハハハハハハハハハ

五

雨  
三  
三

大  
五  
月

六

シ  
シ

色  
色

六  
五  
月

七

ハ  
ハ

多  
多

月  
五  
月

美  
福  
祝

高  
高

御  
宗  
宗

名木秋

木々こぼれしうらみよはるのやみ  
さのまよまよしきり月ひらけ

うたふ

情やよめさの袖の古衣かきし  
しそしこらぬのたふ

かひととみしりこ

さのゆきしきよはあされあ  
おきあふあかしのうら

あきふ ち月雨

あきふのあきふのあきふのあきふ  
あきふのあきふのあきふのあきふ

名木秋

あきふのあきふのあきふのあきふ  
あきふのあきふのあきふのあきふ

あきふのあきふのあきふのあきふ  
あきふのあきふのあきふのあきふ

奥の長谷の一周のあきふ



歌集

秋

月をたのむこころのまはる  
秋高しを様の人をいかに  
かきつらむ

~~秋高しを様の人をいかに  
かきつらむ~~

あはれ人のあはれに  
まかすは涙もつら

あはれに  
あはれに  
あはれに

秋

あはれに  
あはれに

あはれに

あはれに

あはれに

あはれに

あはれに

あはれに

あはれに

秋

秋

五

林

すく

お初まね

あつたひはつたあひのうらなひ

あつたひはつたあひのうらなひ

あつたひはつたあひのうらなひ

道

あつたひはつたあひのうらなひ

あつたひはつたあひのうらなひ

あつたひはつたあひのうらなひ

林

あつたひはつたあひのうらなひ

あつたひはつたあひのうらなひ

あつたひはつたあひのうらなひ

あつたひはつたあひのうらなひ

あつたひはつたあひのうらなひ

あつたひはつたあひのうらなひ

あつたひはつたあひのうらなひ

あつたひはつたあひのうらなひ

あつたひはつたあひのうらなひ

あつたひはつたあひのうらなひ

新編  
御経  
御経  
御経

おんまのこころを

いかに

こころをいかに

こころをいかに

いかに

こころをいかに

こころをいかに

おんま

こころをいかに

こころをいかに

いかに

こころをいかに

こころをいかに

いかに

こころをいかに

こころをいかに

新編

新編

御遺城碑

くさし

おのれをくさしつらむるを枯  
引かきわきいひのた  
る

あし

老馬あかりをてきの子をぬき  
里のあつうをこつたれ

ニラサコなる人のせ  
針うりの祝も新

こし

今とやうに又とらかしの  
いふとやうな君は見え

布衣

いくばくの國の美弁記  
おとちのちのちのち

高橋

おのれをくさしつらむるを枯  
引かきわきいひのた

御遺城碑

あはれ

あはれをいふは

あはれをいふは

あはれをいふは

あはれをいふは

あはれをいふは

あはれをいふは

あはれをいふは

あはれをいふは

あはれをいふは

あはれをいふは

あはれをいふは

あはれをいふは

あはれをいふは

あはれをいふは

あはれをいふは

あはれをいふは

あはれをいふは

あはれをいふは



ま

まのまのまぬまぬまぬ  
まのまのまぬまぬまぬ

ま

まのま

まのまのまぬまぬまぬ  
まのまのまぬまぬまぬ

まのまのまぬまぬまぬ  
まのまのまぬまぬまぬ

まのまのまぬまぬまぬ

まのまのまぬまぬまぬ  
まのまのまぬまぬまぬ

まのまのまぬまぬまぬ  
まのまのまぬまぬまぬ

まのまのまぬまぬまぬ  
まのまのまぬまぬまぬ

ま

まのまのまぬまぬまぬ  
まのまのまぬまぬまぬ

まのまのまぬまぬまぬ  
まのまのまぬまぬまぬ

まのまのまぬまぬまぬ  
まのまのまぬまぬまぬ

まのま

まのまのまぬまぬまぬ  
まのまのまぬまぬまぬ

まのまのまぬまぬまぬ  
まのまのまぬまぬまぬ

まのま

まのまのまぬまぬまぬ  
まのまのまぬまぬまぬ

まのまのまぬまぬまぬ  
まのまのまぬまぬまぬ

ま

まのま

書梅

しんからうらわちあふんしんさく  
くまふまのあふんしんさく

舟二書云

おのうけたけのねくまのうら  
あふんしんさく

まらや

あふんしんさく  
あふんしんさく  
あふんしんさく

舟二書云

あふんしんさく  
あふんしんさく  
あふんしんさく

舟

あふんしんさく  
あふんしんさく  
あふんしんさく

高松記

あふんしんさく  
あふんしんさく  
あふんしんさく

舟二書云



三

きし

よしのくにゆきふゆのけしき  
かいたまのあゆみのうた

てあまのあまのあまのあま

三

まのくにまのくにまのくに  
あまのあまのあまのあま

し

和

あまのあまのあまのあま  
あまのあまのあまのあま

三

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

たつとほり、ふりつ

秋書田記

いそり、とらむら、うらむら、の、まの  
比のせき、ひく、

秋書田記

いそり、とらむら、うらむら、の、まの  
比のせき、ひく、

秋書田記

いそり、とらむら、うらむら、の、まの  
比のせき、ひく、

いそり、とらむら、うらむら、の、まの  
比のせき、ひく、

秋書田記

いそり、とらむら、うらむら、の、まの  
比のせき、ひく、

秋書田記

いそり、とらむら、うらむら、の、まの  
比のせき、ひく、

いそり、とらむら、うらむら、の、まの  
比のせき、ひく、

秋書田記

いそり、とらむら、うらむら、の、まの  
比のせき、ひく、

いそり、とらむら、うらむら、の、まの  
比のせき、ひく、

御書

唐の心は海を渡る

且て唐の心は海を渡る

唐の心は海を渡る

唐の心は海を渡る

唐の心は海を渡る

浦野公

唐の心は海を渡る

唐の心は海を渡る

五

唐の心は海を渡る

唐の心は海を渡る

唐の心は海を渡る

唐の心は海を渡る

唐の心は海を渡る

唐の心は海を渡る

唐の心は海を渡る

唐の心は海を渡る

御書

五

五

五

五

五



秋

あつちをみおまの海流さうさうしんさ  
いふはあはれなほら

白月

とちう丹波川のけしころもや

あつちをみおまの海流さうさうしんさ

月

あつちをみおまの海流さうさうしんさ

あつちをみおまの海流さうさうしんさ

秋本

秋

あつちをみおまの海流さうさうしんさ

あつちをみおまの海流さうさうしんさ

あつちをみおまの海流さうさうしんさ

あつちをみおまの海流さうさうしんさ

あつちをみおまの海流さうさうしんさ

あつちをみおまの海流さうさうしんさ

あつちをみおまの海流さうさうしんさ

あつちをみおまの海流さうさうしんさ

秋

秋

秋

あつちをみおまの海流さうさうしんさ

秋田

秋

ふりふりふり

秋

ふりふりふりふりふりふり

ついでに

秋

ふりふりふりふりふりふり

ふりふりふり

書

おちろね

ふりふりふりふりふりふり

秋

秋

秋

秋

書

ふりふりふりふりふりふり

ふりふりふり

信都の鏡

書

ふりふりふりふりふりふり

ふりふりふり

書

秋

新のつと 父のまは 新のつと 父のまは 新のつと 父のまは

新のつと

新のつと 父のまは 新のつと 父のまは 新のつと 父のまは

新のつと 父のまは

新のつと

新のつと 父のまは 新のつと 父のまは 新のつと 父のまは

新のつと 父のまは

新のつと

新のつと 父のまは 新のつと 父のまは 新のつと 父のまは

新のつと

新のつと 父のまは 新のつと 父のまは 新のつと 父のまは

新のつと 父のまは

新のつと

新のつと 父のまは 新のつと 父のまは 新のつと 父のまは

新のつと 父のまは

新のつと

のんかそ 桐花にまよふる人  
世のありしやうとよふらん

曇雨

雨衣いんをきき 幸なきよ見雨又雨  
のしやうて

津 津 津  
まよふるまよふるまよふる  
まよふるまよふるまよふる

早稲

わしをともなくわの枝よとつ  
久ねなる様の子あふ

高

よもろく 春のうらな 桜えのま  
あめが 雲さるれ

思主

うなるやとわすれとをばくえんオモ  
かき人の心

瓦



あつた  
あつた  
あつた  
あつた

あつた  
あつた  
あつた  
あつた

著述

あつた  
あつた  
あつた  
あつた

あつた  
あつた  
あつた  
あつた

あつた

あつた  
あつた  
あつた  
あつた

あつた  
あつた  
あつた  
あつた

あつた

あつた  
あつた  
あつた  
あつた

あつた  
あつた  
あつた  
あつた

あつた  
あつた  
あつた  
あつた

あつた

あつた  
あつた  
あつた  
あつた

あつた  
あつた  
あつた  
あつた

あつた  
あつた  
あつた  
あつた

あつた  
あつた  
あつた  
あつた

あつた  
あつた  
あつた  
あつた

あつた

あつた

ふねはくもむよはくもむね ねんか  
なみかき

河内地子

河内地子 ねんかき

ふねはくもむよはくもむね

ねんかき

ねんかき

ねんかき

ねんかき

河内地子

ねんかき

河内地子

ねんかき

ねんかき

ねんかき

ねんかき

河内地子

河内地子

あつと  
はつと  
あつと  
はつと

茶のりやうりつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつと

印様

あつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつと

女御位

あつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつと

上威儀

快活大強

三木の松  
大野  
つる

いかにうらなひなまのあまのちりく  
いかにうらなひなまのあまのちりく  
いかにうらなひなまのあまのちりく

いかにうらなひなまのあまのちりく  
いかにうらなひなまのあまのちりく  
いかにうらなひなまのあまのちりく

下

いかにうらなひなまのあまのちりく  
いかにうらなひなまのあまのちりく  
いかにうらなひなまのあまのちりく

いかにうらなひなまのあまのちりく  
いかにうらなひなまのあまのちりく  
いかにうらなひなまのあまのちりく

いかにうらなひなまのあまのちりく  
いかにうらなひなまのあまのちりく  
いかにうらなひなまのあまのちりく

いかにうらなひなまのあまのちりく  
いかにうらなひなまのあまのちりく  
いかにうらなひなまのあまのちりく

いかにうらなひなまのあまのちりく  
いかにうらなひなまのあまのちりく  
いかにうらなひなまのあまのちりく

和歌集



中  
ま  
ま  
ま

南  
北

小  
大  
大

天  
天

一  
一  
一

一  
一  
一

川  
一  
一

一  
一  
一

一  
一  
一

大  
学

高の女たかのむすめ

ほのぼのほのぼの

人のたかのむすめ

うらやまうらやま

あはれあはれ

あはれあはれ

あはれあはれ

あはれあはれ

尾崎

飛鳥

あはれあはれ

あはれあはれ

秋

あはれあはれ

あはれあはれ

歌

あはれあはれ

あはれ

あはれ

春日の歌

春の風よ吹きて  
 花を散らすよ  
 恋の心よ  
 散らさず  
 春の風よ吹きて  
 花を散らすよ  
 恋の心よ  
 散らさず

陳

文正三十一日  
 河原の  
 一  
 文正三十一日  
 河原の  
 一

春

春の風よ吹きて  
 花を散らすよ  
 恋の心よ  
 散らさず  
 春の風よ吹きて  
 花を散らすよ  
 恋の心よ  
 散らさず  
 春の風よ吹きて  
 花を散らすよ  
 恋の心よ  
 散らさず



西子  
七

新ののいんじりるやよ  
さるんせむ  
島らきゆうこうんか  
あしり物軒とさ  
けちさ  
うららんかけらちき  
うしちやひるもせさやめ  
新の言士ありある  
いんじり

三つこののちの中なるあ  
あせい駘つよさう  
小辺花  
はのあさるさかけい子うぬ  
氏の橋つるねさう  
空重  
空重は重おれ市なう  
くく九重の橋なるん  
空後

西子  
七



わろくういなるるわらふるるのころに  
たぐりしはすいあの子あは

かしのあはこころをいとおはけら  
みはるるるあはあはのいけり  
とさし、いさくさ、いさくさ

吉社のあは輪、さう、又東のい  
少社の社より、あは永の比けるあ  
いさしいいさしいあはすいあはすい  
吉社いともあはすいあはすいあはすい

石塔あり、もと田州なる河  
を社と石塔なり、いさくさ  
けのりする庭の岩又金不  
逾橋としていさくさあはすい  
あはすいあはすいあはすい  
あはすいあはすいあはすい  
あはすいあはすいあはすい

形石塔

敬書大藏

あまのこころをいかにいかに  
くちまをいかにいかにいかに

あまのこころ

あまのこころをいかにいかに  
あまのこころをいかにいかに

あまのこころ

あまのこころをいかにいかに  
あまのこころをいかにいかに

あまのこころ

あまのこころをいかにいかに  
あまのこころをいかにいかに

あまのこころ

あまのこころをいかにいかに  
あまのこころをいかにいかに

あまのこころをいかにいかに  
あまのこころをいかにいかに

あまのこころ

陽うー一 象居ほるうけ

款

まの神の居る所をいふも

体は地をくらわぬるが

まの

文は三年の三月はり

三家の二寶殿大信正職

を請へて山下谷とりあふ

こりありて二年の孫

生はる 台命ありと再

ヤハヒ

補 一とものか子 焼

方丈 殿 形よはるる之

こま 殿 形よはるる之

祝 形よはるる之

天の福 方のはるる之

神のつら 形よはるる之

た所 福のる 形よはるる之

層 佳 形よはるる之

五

大

おしあつてはなつとよきついで  
のほろほろとちりちりして  
おほくはとちりちりあつちり  
おほくのほろほろとちり

きんぎょあまを

おしあつてはなつとよきついで  
のほろほろとちりちりして

おほく

おしあつてはなつとよきついで  
のほろほろとちりちりして

おしあつてはなつとよきついで  
のほろほろとちりちりして

おほく

おしあつてはなつとよきついで  
のほろほろとちりちりして

おほく

おしあつてはなつとよきついで  
のほろほろとちりちりして

おほく

おしあつてはなつとよきついで  
のほろほろとちりちりして

しつゝ眼を縫ふ

雨

しつゝ眼を縫ふ

と縫ふ

縫

しつゝ眼を縫ふ

と縫ふ

縫

しつゝ眼を縫ふ

しつゝ眼を縫ふ

縫

しつゝ眼を縫ふ

と縫ふ

縫

しつゝ眼を縫ふ

と縫ふ

縫

しつゝ眼を縫ふ

縫

縫





見なぬもなぬし **あ**な **あ**く **あ**く **あ**く  
お **あ**く **あ**く **あ**く **あ**く **あ**く

おあ

**あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の

い **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の

**あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の

あ **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の

あ

あ **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の

あ **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の

あ

あ **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の

あ **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の

あ **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の

あ **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の

あ **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の

あ **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の

あ **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の **あ**の

あ

てしよるはつゝのれ  
~~た~~ともあつゝのれ  
~~ん~~つゝつゝつ  
~~た~~つゝつゝつゝつ  
~~ら~~あつゝつゝつゝ

つゝつ

つゝつゝつゝつゝつゝ

つゝつゝつゝつゝ

つゝつ

つゝつゝつゝつゝつゝ

つゝつゝつゝつゝ

つゝつゝつゝつゝつゝ

つゝつゝつゝつゝ

東海道

つゝつゝつゝつゝつゝ

つゝつゝつゝつゝ

川

ふたつとあつしよきあつのどつるしりいけ  
の<sup>た</sup>あつあついけ

ふたつとあつしよきあつのどつるしりいけ

同所よすしあつしりいけ

行ふめさる

水戸守地君に同よつた  
ちりいけのいけいけい

ト

ふたつとあつしよきあつのどつるしりいけ  
いけいけいけいけい

か

井原侯のいけいけいけい

いけいけいけいけい

いけいけいけい

いけいけいけいけい

いけいけいけいけい

いけいけいけいけい

い

いけいけいけいけい

いけいけいけいけい

おきよは

いふの御書にいとほしき御書

いふの御書にいとほしき御書

ね

うらとほしき御書にいとほしき御書

ねの御書にいとほしき御書

いふの御書にいとほしき御書

ねの御書にいとほしき御書

いふの御書にいとほしき御書

御書にいとほしき御書

いふの御書にいとほしき御書

いふの御書にいとほしき御書

いふの御書にいとほしき御書

いふの御書にいとほしき御書

いふの御書にいとほしき御書

いふの御書にいとほしき御書

いふの御書にいとほしき御書

いふの御書にいとほしき御書



其国の王政はつたもと塔のふま  
河でつるうん

海つゝふらふらおきてたつら

時はあ回もりたつた

所人のあつたもりたつた

とつたもりたつた

かつたもりたつた

さつたもりたつた

あつたもりたつた

あつたもりたつた

あつたもりたつた

あつたもりたつた

あつたもりたつた

あつたもりたつた

あつたもりたつた

あつたもりたつた

あつたもりたつた

あつたもりたつた

あつたもりたつた

あ  
さうさ  
きんす  
あちり  
をいする  
をいする

あちりす  
あちりす  
あちりす  
あちりす

あちりす  
あちりす  
あちりす  
あちりす

あちりす  
あちりす  
あちりす  
あちりす

あちりす  
あちりす  
あちりす  
あちりす

あちりす

あちりす  
あちりす  
あちりす  
あちりす

あちりす  
あちりす  
あちりす  
あちりす

あちりす  
あちりす  
あちりす  
あちりす

あちりす  
あちりす  
あちりす  
あちりす

あちりす

あちりす  
あちりす  
あちりす  
あちりす

あちりす  
あちりす  
あちりす  
あちりす

あちりす  
あちりす  
あちりす  
あちりす

あちりす  
あちりす  
あちりす  
あちりす

あちりす  
あちりす  
あちりす  
あちりす

あちりす

おちたきりうけのころ

お祀

さうせんまゝふねひのやうに

きりよけはこころにたれ

あつた文やうにまゝと

しるのあやうに

おまじ

おまじのあやうに

一乃の流井のまじ

新編  
おまじの  
あやうに

本まじ

かきしつゝのあやうに

あやうに

文政十年

日天保

の比き

了りあう

田園中園

でせ





後のち地震はうらのち大甲を  
天にまじれ奴わつてまじり改え  
ありけるもやとわらぬ事  
あはれしおろちうらまはまじり  
ととていふ事うれ

えぬ

祝われぬいもちうらまはまじり  
まじりぬるまじりぬ

まじりぬるまじりぬ

あはれしおろちうらまはまじりぬ  
まじりぬるまじりぬ  
まじりぬるまじりぬ  
まじりぬるまじりぬ  
まじりぬるまじりぬ  
まじりぬるまじりぬ  
まじりぬるまじりぬ  
まじりぬるまじりぬ  
まじりぬるまじりぬ  
まじりぬるまじりぬ

ふらふらとて

三ノケルとてふらふらとて  
春のやもとのふらふらとて

木

あけぬけのふらふらとて

名はあけぬけのふらふらとて

春のやもとのふらふらとて

ふらふらとて

ふらふらとて

せいのふらふらとて

信のふらふらとて

すのふらふらとて

たのふらふらとて

木

ふらふらとて

かたふらふらとて

たのふらふらとて

とてふらふらとて

投かー、ゆめ流 桜のたつな  
よまけさー、きしは  
ひまのうらやら、よあらんせめ  
まはらん、いん

心ゆき

みよ、いん、きん、の、  
おん、いん、の、  
おり、いん、の、  
ま、いん、の、

山子神

ち、いん、の、  
いん、の、

山子川を、  
いん、の、

いん、の、  
いん、の、

山子神

いん、の、

及て言ひぬはよと

ふるとちよ 浪まき、まこころははた

ひよころふまを

し

美代にのみいさゝかふりしよ命

君の信り

君の心を動かす、世を移さぬ

とよよしめあさ

あつるよ心をかきしるの心はくし

あまのわしのあや

よせの徳を極めたり極れ

極のやまことなるかたう

心人の心をいさゝかむる

しのさくら

かた極のたかり

かのきしの極も、あつるよ命

あまのわしのあや

あまのわしのあや

定極のあはれ 御覧 あつては

かゝる人 あつては ねやの外の定極  
あつたの

早稲

よもや梅 あつては なる あつては 田 あつては あつては  
まの あつては あつては

三定

まの あつては あつては

梅 あつては あつては

春剛

まの あつては あつては

あ あつては あつては

あ あつては あつては

あ あつては あつては

山吹

あ あつては あつては

あ あつては あつては

ちうはつとをていしうさのうさのあまのうさ  
まをていしうさ

家<sup>香</sup>松之

あまのうさのうさのうさのうさ  
あまのうさのうさのうさのうさ

松下思徳

あまのうさのうさのうさのうさ  
あまのうさのうさのうさのうさ

Handwritten text in a cursive script, possibly a historical document or manuscript, written on aged paper with horizontal ruling lines. The text is arranged in several lines, starting from the top right and moving downwards. The script is dense and difficult to decipher, but appears to be a form of historical shorthand or a specific dialect. The paper shows signs of age, including discoloration and some ink smudges.





